

---

# 刹那の火

橘 太智

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

刹那の火

### 【Nコード】

N1619N

### 【作者名】

橘 太智

### 【あらすじ】

戦争中にあつたかもしれない、或る逸話。

(前書き)

戦争中にあつたかもしれない、或る逸話。

/

おーーーーーん

大気を劈くサイレンの音が鳴り響く。

私はただ戦慄した。

訳も解らず、恥も外聞も無く、何もかも捨てて逃げていた。

熱い、熱い、熱い　　！

真っ赤な炎が滝のように流れ落ちる異様。

風に煽られた火の吹雪が横殴りに肌を刺す。

阿鼻叫喚の地獄の中を、街の人々が逃げ惑う。

消火訓練は受けたけれど、もう火を消すどころの話じゃない。  
一刻も早くこの場から逃げなければ。

でも、何処へ逃げればいい？

四方八方、見渡す限りに火の海だ。

視界には高熱の赤しか映らない。  
真っ黒な空には無数の機影が飛び交っている。

その中で、

「  
っ!？」

誰かが何かを叫んでいる姿が見えた。  
どうでもいい事だと、一瞬思った。それよりも、早くこの場を離れなければと。

人としての道德なんてどうでもいい。  
原始の本能に従って、ただ生き延びる事だけを考える。  
そうしようと決めた瞬間、

「早くしろ！」

男の声が聴こえた。  
どうでもいい事だった。  
なのに、何故か私は、もう一度その方向を振り返った。

「  
あ」

大きな建物の玄関が、脇の折れた柱から崩れ落ちようとしている。  
それを一人の男が手で必死に支えようとしている。

莫迦な、と思う。

そんな事、出来る筈がない。

仮に可能だったとしても、もう無駄だ。だってその家は既に炎に包まれている。

だが、私は次の瞬間に理解した。

家の周りは火だらけで、もう出入りできる場所はその玄関しかない。

そして、その家の中からいくつもの子どもの姿と声が

「大丈夫ですか!？」

「な、あんた　　っ!？」

男が目を瞠って駆け寄ってきた私の姿を見つめていた。

私は、その彼以上に自身のその行為に驚きながら、

「中に居る子どもは!？　あと、何人ですか!？」

「あ……あと一人だ!」

聞くや否や、脇目も振らずに中へ飛び込んだ。

目と喉が焼け付きそうになりながら、私は炎の中を駆け抜ける。勘だけを頼りに、ぐるぐると家の中を眺め回す。

子どもはすぐに見つかった。

六、七歳ほどの、小さな女の子。少し奥に入っところの居間で、

防空ずきんを被った格好で蹲すくまっていた。

「ええいつ！」

話し掛けている暇は無い。

まだ生きていると見るや子どもの服の後ろ襟を引っ掴み、すぐさま来た道を引き返す。

途中、炎に朽ちた天井ががらと落ちてきた。

火事場の馬鹿力というのは本当の事だ。私は熱いとも感じられず、邪魔なそれを殴り蹴りつとにかく走った。

「子どもは見つけた！ 早く逃げるぞ！」

「すまねえ、恩に着る！」

成功だ。

ひとつの命が生き長らえた瞬間だった。

しかし、喜んでいる場合じゃない。

そんな感情は微塵も沸き起こらず、私はすぐさま次の行動を考える。

道に出たところで子どもを離し、今度こそ早く逃げようとして

「ぬあああつ！」

「なあっ！？」

玄関の折れた柱が、横の巨大な壁と一緒に落ちてくる。  
それを見た私は

「ぬ、ぐ　　っ！！」

「あんたっ！？」

その倒壊する壁を支えに走っていた。

正直、何がなんだか訳が分からなかった。

あるいは、私はとうに気が触れているのかもしれない。

見ず知らずの家族の為に、なんで、こんな

「ダメだ！　もたないっ！！」

凄まじい重圧が押し掛かる。

あと一分も耐えられない事を、掌が訴えていた。

それを確信した私が発した言葉は、

「親父さん、先に行け　　っ！」

「な、なんだって！？」



だから、なんで私は、こんな事を

「ここはもう駄目だ！ 先に離れろっ！」

人間二人の力では支えきる事は不可能。

しかし、二人が手を離せば倒壊する家の下敷きになる。

無論、私一人で支える事は出来ないが、体躯に勝る私の方がまだ  
確実だ。

片方が逃れるまでの、僅かな時間を稼ぐくらいの事は

「二人とも死ぬ事はない！ 早く行け！」

「し、しかしっ                      ！？」

えーん、えーん。

刹那、

私たちは炎の轟音に掻き消されそうな、その声を聴いた。

立ち尽くし、泣き続ける小さな少女。

歯を喰いしばり、けれど瞳に絶望の色を浮かべる父親。

……私は、全身全霊を懸けて、声の限りに叫んだ。

「何してるこの馬鹿親父っ！ 早く娘を助けに行けええっ！！！」

微かな逡巡。  
僅かな沈黙。

永遠とも思われたその一瞬、悲壮な顔を私に見せた父親は、

「すまないっ！！」

その後ろ姿を、私は確かにこの眼へと焼き付けた。

泣き腫らす幼い少女がその逞しい腕に抱かれる光景を確かに見た。

そして私は、

「は  
」

私は、確かに笑っていた。

目を剥いたまま口の端を吊り上げる私は、きっと凄絶なまでの笑顔だった事だろう。

何故、この私はこんな事をしたのか。

何故、この街がこんなふうには焼かれなければならなかったのか。

何故、この世界にこんな地獄が有り得たのか。

私には、何も解らない。

私は、いったい何だったのか。

倒壊する炎の家屋に押し潰される。

その一瞬に、振り返らなくてもいいものを振り返った父娘の姿が、眼の端に視えた。

彼らが生き残れるかどうかは解らない。

数分の後には、彼らも街の炎に吞まれているかもしれない。

私がした事が確かに報われるとは思わないし、

救われた彼らが真に幸運だった  
とは限らない。

だが、それでも……

「生きる　　っ!!!!」

朱<sup>あけ</sup>に沈むその瞬間。

この私は彼らに向かって、炎のように笑う事を選んでいた

/ 刹那の火・了

**（後書き）**

何か書かなければ、と思い立って書き上げました。

名もなき一人の人間の心にあつた、

刹那に燃え上がった炎を感じて頂けたならば幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1619n/>

---

刹那の火

2010年10月10日20時06分発行